

令和 6 年 9 月 19 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H03945

研究課題名(和文)慢性疾患をもつ子どもを含む家族の役割移行を支える多職種協働プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a multi-professional collaborative program to support the transition of family roles including children with chronic diseases

研究代表者

本田 順子 (Honda, Junko)

兵庫県立大学・地域ケア開発研究所・教授

研究者番号：50585057

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、健康・療養管理における保護者から子どもへの役割の移行における現象(家族現象)を、特に親子の相互作用に焦点を当て、家族を1つの単位として理解することを目的とし、システムティック・レビュー/スコーピング・レビュー、インタビュー調査、質問紙調査を実施した。子どもと保護者はお互いの言動に影響を受けながらも、個人として、また家族として成長発達を遂げている。この現象を丁寧に明らかにすることで、医療者は子どもと家族を1つのユニットとして子どもがセルフケアを獲得する過程を支援するための示唆を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの子どものセルフケア能力獲得についてはの研究では、子どもに焦点が当てられているものが多く、保護者は、子どもの背景として捉えられていたが、本研究では、親子の相互作用に焦点を当て、家族を1つの単位として健康・療養管理における保護者から子どもへの役割の移行における現象を明らかにした。本研究結果は医療者が子どもとその家族をトータルで支援する上で必要な支援を提供する。

研究成果の概要(英文)：In this study, a systematic review/scoping review, an interview survey, and a questionnaire survey were conducted to understand the phenomenon in the transition of roles from parents to children in health and medical care management, with a particular focus on the interaction between parents and children, and to understand the family as a single unit. Children and parents grow and develop as individuals and as a family, while being influenced by each other's words, actions, and behaviours. Careful clarification of this phenomenon provided suggestions for health care providers to support the child's process of acquiring self-care by treating the child and family as a unit.

研究分野：小児看護・家族看護

キーワード：親子関係 家族看護 慢性疾患 小児 セルフケア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

医療の進歩に伴い、先天性の障害や疾患や小児期に発症する疾患をもつ子どもが長期生存できるように、保護者が担っていた健康・療養管理や治療・療養に関する意思決定を子ども本人へと移行する過程を支援することが求められている。また、医療の進歩は、治療や療養先の選択肢の幅を広げており、患者と家族の健康・療養管理や意思決定は複雑で困難な状況にある。

このような背景から、子ども自身が、健康・療養管理や治療・療養に関する意思決定ができるようになる、すなわち、子どもが健康に関連したセルフケア力を獲得するためには、医療職者からの支援は必須である。しかしながら、特別な健康管理を必要とする青少年とその家族の多くは、小児から成人の医療への移行に必要なサポートを受けていないと指摘されている<sup>1)</sup>。

子どものセルフケア能力獲得については、多くの研究がなされているが、現状では、子どもに焦点が当てられているものが多く、保護者は、子どもの背景としか捉えられていない。子どもは成長・発達する存在であるが、家族発達理論<sup>2)</sup>の観点からみると、家族もまた成長発達している。保護者が担ってきた健康管理を子ども自身へ移行するには、子どものみ、または保護者のみにアプローチするのでは不十分であり、家族を1つの単位とみなした支援が必要である。また、家族システム理論<sup>2)</sup>の観点から、家族員同士は相互作用していること、また親子、夫婦、きょうだいなど家族内にはサブシステムがあり、サブシステム同士もそれぞれ相互作用している存在であるので、役割移行においては、子どもと保護者の相互作用も変化しているという点に注目する必要がある。加えて、夫婦間や親子間、きょうだい間の相互作用も変化している可能性もある。

保護者から子どもへの役割移行の過程において、子どものことを心配するあまりなかなか過保護から離脱できない保護者も多い現状があり、子どもと保護者の相互作用の変化を学術的に明らかにした上で支援策を検討することは重要である。しかし、家族内の相互作用に注目し、家族を1つの単位とした健康・療養管理における保護者から子どもへの役割の移行についての研究は見当たらない。

### 2. 研究の目的

本研究では、健康・療養管理における保護者から子どもへの役割の移行における現象(家族現象)を、特に親子の相互作用に焦点を当て、家族を1つの単位として理解することを目指す。その上で、その移行を支えるための多職種協働の介入方法を検討する。

### 3. 研究の方法

#### 研究1

慢性疾患をもつ子どもがセルフケアを獲得する過程における親子の相互作用の現象を明らかにするためにシステマティック・レビュー/スコوپング・レビューを実施した。

- 1) 文献検索にはPubMedとCINAHLデータベースを用いた。検索語は、思春期、子ども、乳児、核家族、片親家族、親子関係、セルフケアとした。包含基準は、英語文献、全出版年、慢性疾患を有する小児。除外基準は、知的障害や精神障害のある子ども、論説、レター、コメント。この基準に基づき、研究者全員が独立して研究をスクリーニングした。
- 2) 文献検索にはMEDLINEおよびCINAHLデータベースを用いた。検索語は、思春期、思春期の発達、親子関係、意思決定、動機づけ、葛藤、意図、不安とした。包含基準は、英語文献、2000年以降に出版されたもの、慢性疾患のある子ども。除外基準は、知的障害または精神障害のある子ども、論説、レター、コメント。これらの基準に基づき、研究者全員が独立して研究をスクリーニングした。
- 3) HbA1cに対する親の心理社会的影響に関するエビデンスの信頼性を分析するために、スコوپングレビューを実施した。本レビューでは、HbA1cをアウトカムとする一型糖尿病(T1DM)の青年における血糖値の自己コントロールに対する親の心理社会的影響に焦点を当てた。(a)T1DMの青年を持つ親の促進的/抑制的な心理社会的影響は何か(b)HbA1cコントロールとの関連で評価された親の影響の証拠からなる研究の信頼性はどのようなものであったか。選択した研究の基準は次の通りである:(a)英語で発表されたもの、(b)T1DMの若者を主な対象としたもの、(c)研究結果にHbA1cを含むもの、(d)T1DMの子どもに対する親の影響に焦点を当てたもの。

#### 研究2

慢性疾患をもつ思春期患者の意思決定の実態を患者と保護者の相互作用に焦点をあてて明らかにするために患者と保護者を対象としたインタビュー調査を実施した。1事例については、「子どものセルフケア看護理論」<sup>3)</sup>を参考に患者と保護者の相互作用について分析した。次に18事例を対象に、グラウンデッド・セオリーアプローチを用いて、患者と保護者の相互作用について分析した。

#### 研究3

小児看護の専門性に関する認識について、医療者への質問紙調査を実施した。まず、総合病院の看護師が認識する難しい小児看護技術と学習ニーズについてのWeb調査を実施した。質問紙の内容は、先行研究を参考に、小児看護技術16項目について、「特に問題なくできる」から「全

くできない」までの4件法と小児看護の特殊性や専門性についての認識を尋ねた。次に小児科医・小児外科医を対象とし、Webによる質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、看護師などのスタッフが小児の対応に不慣れなため苦労した経験について、医師から見た小児看護の専門性についてとした。

#### 4. 研究成果

##### 研究1

- 1) 多くの論文が、思春期の子どもとその親に焦点を当てていた。慢性疾患とともに生きる子どもは、楽しい能動的な学習や家族の社会的プロセスを通じて、セルフケアを支援される可能性がある。親にとって大きな問題は、子どもの苦痛を防いだり、最小限に抑えたりすることであり、それは親自身の状況に対する感情的な不快感と密接に関連していた。子どもがセルフケアを身につけるためには、医療従事者が親子の相互作用を理解した上で介入する必要があることが示唆された。子どもや親だけに焦点をあてた研究が多かったため、今後の課題として親子の相互作用に焦点をあてた研究が必要であることが明らかとなった。
- 2) 基準を満たした28文献から、意思決定を評価していないもの(n=18)、子どもと親の相互作用を記述していないもの(n=2)、他分野のもの(n=1)を除外した。本研究の分析には10件の文献が含まれた。親子関係の中で行われる意思決定は、子どもの疾患、重症度、意思決定における責任が誰なのか、親の不安、家族の社会経済的状況に関連する。疾患の有無と家族の社会経済的状況は子どもの意思決定の欲求を遅らせることになるという報告があった。多くの論文は、子どもと親と医療者による共同意思決定を推奨しているが、子どもと親は共同意思決定よりも受動的な意思決定を好むという報告もあった。身体的・心理的・経済的・社会的な家族の問題は、思春期の意思決定に影響を与える。医療者は思春期の子どもの意思決定能力を家族員の背景・家族の心理的と社会経済的な状況、親子の関係性からアセスメントする必要があることが明らかとなった。
- 3) 476件の論文のうち、14件が含まれた。研究成果は直接的または間接的な影響に基づいて分類された。4つのエビデンスレベルに分けられた：(a)2つ以上の研究が、HbA1cの減少に関する促進的/抑制的な有意関係または相関の証拠を提供した；(b)1つの研究が、HbA1cの減少に関する促進的/抑制的な有意関係または相関の証拠を提供した/HbA1cの減少に関する促進的な有意関係または相関の部分的または間接的な証拠を提供した；(c)重要でない証拠であるが、傾向が確認された；(d)重要でない証拠であり、傾向が確認されなかった。下図に、HbA1cの低下に対する抑制的な有意関係または相関を示した。

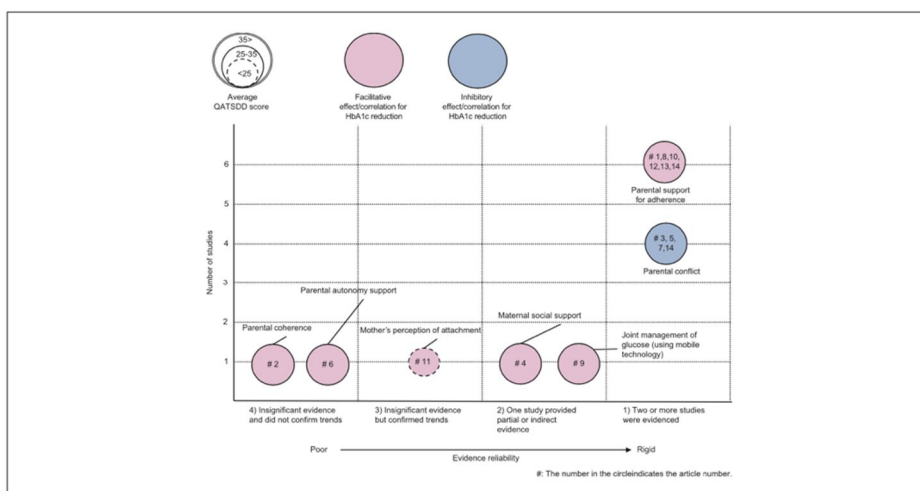


Figure 2. Evidence Map of Studies on the Effect on Glycated Hemoglobin (HbA1c).  
Note. QATSDD = Quality Assessment Tool for Studies with Diverse Designs.

##### 研究2

- 1) セルフケア能力には自身の意思決定能力が必要であると考えた。すなわち、子どもの意思決定能力の発達には、子どものセルフケアに影響を及ぼす。発達途上では療育者の補完が必要となり、最終的には療育者の補完を必要とせず子ども自身の意思決定が確立される。そこで本研究は、子どもの意思決定能力が発達していく過程、および、子どもの意思決定における療育者の補完が減少していく過程を明らかにすることを目的とした。対象は10歳前半に1型糖尿病を発症し、調査当時20歳前半の女性患者であった。患者は友人達との関係をストレスに思い過食してしまい、自身のセルフケアが低下することがあった。患者に母親は「病気になったのはあなたのせいじゃない」と伝えており、患者は母親の関わりにより気持ちが救われていたと語られた。患者は成長と共に、セルフケアの意識が変化していき、自分のために頑張ろうという気持ちが芽生えたことで、ストレスによる過食も少しずつ減っていき、患者会にも積極的に参加するようになった。母親も、大学進学を機会に患者に一人で受診するように促し、セルフケアの補完を減少させていた。子どもは保護者との相互作用の中で、セルフケアの発達をさせていき、同時に意思決定能力の発達もさせていると考えられた。

次に、18 事例を分析した結果、保護者は「治らない病気になってしまった」という思いをもち、病気があるからできないことがあるのは仕方がないが、自分で疾患管理をして欲しいと思っていた。そこで、道具的サポート、情緒的サポートを実行していた。子どもは、それを受け、「疾患管理はがんばれない」という思いをもちながらも、自分のことをサポートしてくれている保護者に対して感謝の気持ちをもったり、病気をもつ自分を前向きに捉えられたりしていた。子どもが頑張っている姿をみて、保護者は誇らしく感じたり、子ども自身が病気をコントロールできている感覚をもったりすることで、子どもができるようになるために、子どもにやらせるという「あえてサポートを減らす」ということも行っていた。すなわち、保護者は子どもの反応から、子どもがどう思っているかを考え、サポートの内容や量を調整していることが明らかとなった。

### 研究 3

総合病院に勤務する看護師 187 名からの回答があった（図：対象者の属性）。

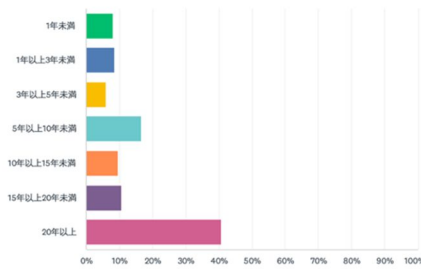


図1. 対象者の臨床経験年数

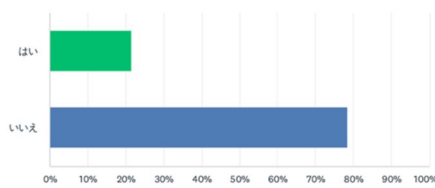


図2. 小児領域での臨床経験の有無

臨床経験は、20年以上が40.7%で最も多く、次いで5年以上10年未満が16.6%であり、1年未満から20年以上と幅広い層の回答が得られた。小児領域での臨床経験については、有りが21.6%、無しが78.5%だった。小児看護の技術で「全くできない」「かなり難しい」と回答した項目の上位には、腎生検介助、NGチューブ挿入、力価(mg)を使用した指示受け、CPR、採血、点滴挿入等があげられた。小児看護の特殊性や専門性については、発達段階に合わせた子どものケア、うまく症状を訴えられない子どもの病状を理解できる観察力、子どもの気持ちを代弁すること、子どもだけでなく、両親や兄弟姉妹なども含めた看護が必要であることなどがあげられた。

医師への調査では、35名の小児科医・小児外科医からの回答があった。看護師などのスタッフが小児の対応に不慣れなために苦労した経験があると回答した医師は32名(94.1%)であった。最も多かったのは「保護者との接し方」(74.2%)、「処置中の患児のケア」「点滴・胃ろう・バルーンの固定」(64.5%)、「患児のフィジカルアセスメントとモニタリング」(58.1%)だった。具体的には、「小児に対する点滴の重要性の理解不足」、「恐怖心の認識不足」、「タオルによる拘束としての鎮痛」などがあげられた。また、小児科医から見た必要な小児看護技術・能力について尋ねたところ、次のようなことがあげられた：「子どものことを第一に考えること」、「子どもの苦痛のサインを拾えること」、「子どもや親との十分なコミュニケーション能力」、「子どもが急に泣いたり暴れたりしたときにフォローできること」、「子どもの背景に気を配れること」、「子どもの親を理解できること」、「子どもの気持ちや考えを理解できること」、「小児看護の専門的な立場から医師にアドバイスできること」。

### 考察

本研究では、慢性疾患をもつ子どもがセルフケアを獲得する過程における親子の相互作用の現象を明らかにするために文献研究やインタビュー調査を実施した。子どもと保護者はお互いの言動に影響を受けながらも、個人として、また家族として成長発達を遂げている。この現象を丁寧に明らかにすることで、医療者は子どもと家族を1つのユニットとして子どもがセルフケアを獲得する過程を支援するための示唆を得ることができた。18事例の分析を深めていくと、子どもと保護者のやりとりにはパターンが見えてくるだろう。セルフケアの獲得を促す相互作用に、家族の外部環境である医療者がどのように関わられるのか、今後検討していきたい。

一方で、医療者への調査から、小児科医・小児外科医への調査から小児に不慣れな看護師との連携に苦労している医師が多いこと、またどのような場面で苦労しているのかを明らかにすることができた。子どもを一人の人間として扱うこと、子どもの成長・発達の特徴に合わせることで、保護者に対応することは基本的な態度であり重要なスキルであるが、現在の臨床現場ではまだまだ課題である。臨床現場での継続的な教育も必要であることが示唆された。

慢性疾患をもつ子どもがセルフケアを獲得するために、子どもと家族を一体に捉えた支援は不可欠である。多くの子どもが入院するのは、小児専門病院ではなく総合病院やクリニックであり、訪問看護ステーションの利用も増えている。つまり、子どものセルフケアの獲得を促す親子の相互作用に働きかけるという小児看護の技は、「子どもの背景に気を配れること」、「子どもの

親を理解できること」「子どもの気持ちや考えを理解できること」「子どもや親との十分なコミュニケーション能力」など、本研究でも明らかになった小児看護の専門性を高める必要があるため、小児専門看護師などのスペシャリストを活用しながらも小児に特化していない医療スタッフに対して、本研究で明らかになった学習ニーズを考慮した教育プログラムの実装が急務である。

<引用文献>

- 1) White, P. H., & Cooley, W. C. (2018). Supporting the Health Care Transition from Adolescence to Adulthood in the Medical Home. *Pediatrics*, 142(5): e20182587.
- 2) 上別府圭子ら (2018). 系統看護学講座 別巻 家族看護学, 医学書院
- 3) 片田範子編 (2019). こどものセルフケア理論, 医学書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Van Riper, M., KnafI, G., Barbieri Figueiredo, M., Choi, H., de Graaf, Gert, Duarte, E., Honda, J., ... KnafI, K.	4. 巻 27(1)
2. 論文標題 Measurement of Family Management in Families of Individuals with Down Syndrome	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Family Nursing	6. 最初と最後の頁 8-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1074840720975167	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 本田順子	4. 巻 47
2. 論文標題 ダウン症のこどものいる家族の家族力を高めるには	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子供の城	6. 最初と最後の頁 5-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 国分映希, 本田順子	4. 巻 32
2. 論文標題 疾患を経験した子どものPosttraumatic Growth（心的外傷後成長）に関する文献検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本小児看護学会誌	6. 最初と最後の頁 213-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Miku Yamaguchi, Junko Honda, Minae Fukui	4. 巻 29
2. 論文標題 Effects of Parental Involvement on Glycemic Control in Adolescents With Type 1 Diabetes Mellitus: A Scoping Review	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of family nursing	6. 最初と最後の頁 382-394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/10748407231171842	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Marcia Van Riper, George J. KnafI, Kathleen A. KnafI, Maria do Ceu Barbieri-Figueiredo, Sivia Barnoy, Maria Caples, Hyunkyung Choi, Beth Cosgrove, Elysangela Dittz Duarte, Junko Honda	4. 巻 Epub
2. 論文標題 Family adaptation in families of individuals with Down syndrome from 12 countries	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 American Journal of Medical Genetics Part C: Seminars in Medical Genetics	6. 最初と最後の頁 e32075
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/ajmg.c.32075	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 福井 美苗, 本田 順子, 宮脇 郁子	4. 巻 5
2. 論文標題 慢性疾患をもつ思春期患者の意思決定の実態 患者と保護者の相互作用に焦点をあてて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Phenomena in Nursing	6. 最初と最後の頁 26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Honda, J., Fukui, M., Yamaguchi, M., Katsuda, H., Yamaguchi, T., Miyawaki, I.
2. 発表標題 Parent-child interactions in self-care acquisition of child with chronic condition: A systematic review
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Fukui, M., Honda, J., Miyawaki, I.
2. 発表標題 Adolescent-parent interactions in decision-making of adolescent with chronic condition: A systematic review
3. 学会等名 15th International Family Nursing Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 牧野彩夏, 藤井わかば, 本田順子
2. 発表標題 ダウン症の子どもをもつ家族の子どもの成長発達に伴う家族ニーズの変化
3. 学会等名 第27回日本家族看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Junko Honda, Minae Fukui, Miku Yamaguchi, Hitomi Katsuda, Tomoko Yamaguchi, Ikuko Miyawaki
2. 発表標題 Parent-child interactions in self-care acquisition of child with chronic condition: A systematic review
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Minae Fukui, Hitoshi Ogasawar, Mika Kitao, Junko Hond, Yuichi Fuji
2. 発表標題 Challenges faced by Japanese pediatric nurses in providing healthcare transition support and decision-making support
3. 学会等名 The 27th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 本田順子, 萩岡あかね
2. 発表標題 総合病院の看護師が認識する難しい小児看護技術と学習ニーズについて
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 国分映希, 本田順子
2. 発表標題 小児期の手術の経験に関連した Posttraumatic Growth(心的外傷後成長) の実感とその要因
3. 学会等名 日本小児看護学会第33回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Junko Honda
2. 発表標題 Incubating Family Nurse Scientist Across the Globe
3. 学会等名 16th International Family Nursing Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本田順子
2. 発表標題 在宅医療的ケア児の健康, 発達, 参加を支えるための家族支援
3. 学会等名 第27回日本医療保育学会 総会・学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 M. Fukui, H. Ogasawara, M. Kitao, J. Honda, Y. Fujita
2. 発表標題 Differences in Practice and Degree of Significance in Support to Enhance Decision-making Abilities for Pediatric Nurses in Japan
3. 学会等名 The 26th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本田順子, 高谷知史, 中口尚始
2. 発表標題 小児領域の遠隔診療・看護における子育て期家族の現状とその支援に関する考察
3. 学会等名 日本家族看護学会第28回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福井美苗, 本田順子, 宮脇郁子
2. 発表標題 慢性疾患をもつ思春期患者の意思決定の実態：患者と保護者の相互作用に焦点をあてて
3. 学会等名 第1回理論看護研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本田順子, 高谷知史, 飯島一誠
2. 発表標題 わが国における腎不全の子どもをもつ家族への支援：文献レビューによる先行研究結果の統合
3. 学会等名 第40回日本小児腎不全学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 飯島 一誠, 稲垣 由子, 本田 順子, 八木 麻理子, 永瀬裕朗	4. 発行年 2024年
2. 出版社 総合医学社	5. 総ページ数 200
3. 書名 保育者のためのわかりやすい子どもの保健 (第2版)	

1. 著者名 飯島, 一誠, 稲垣, 由子, 本田, 順子, 八木, 麻理子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 総合医学社	5. 総ページ数 192
3. 書名 保育者のためのわかりやすい子どもの保健	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山口 未久 (Yamaguchi Miku) (20771132)	京都府立医科大学・医学部・講師  (24303)	
研究分担者	粟野 宏之 (Awano Hiroyuki) (30437470)	鳥取大学・研究推進機構・教授  (15101)	
研究分担者	福井 美苗 (Fukui Minae) (70882207)	武庫川女子大学・看護学部・助教  (34517)	
研究分担者	宮脇 郁子 (Miyawaki Ikuko) (80209957)	神戸大学・保健学研究科・教授  (14501)	
研究分担者	山口 智子 (Yamaguchi Tomoko) (80843052)	兵庫県立大学・看護学部・助教  (24506)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	勝田 仁美  (Katsuda Hitomi)  (00254475)	兵庫県立大学・看護学部・名誉教授    (24506)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	国分 映希  (Kokubu Aki)	淀川キリスト教病院・小児看護専門看護師	
研究協力者	萩岡 あかね  (Hagioka Akane)	ありす訪問看護神戸ステーション・小児看護専門看護師	
研究協力者	高谷 知史  (Takatani Satoshi)  (90757303)	大手前大学・国際看護学部・准教授   (34503)	
研究協力者	中口 尚始  (Nakaguchi Hisashi)  (30823504)	京都府立医科大学・医学部・助教   (24303)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	ノースカロライナ大学チャペルヒル校		